

実践！プレスクール10年、これまでの取り組み —行政の区切りや様々な立場をこえて「つながる」学習と支援をめざして—

坪井牧子 (大垣市プレスクール)

桐山知弘 (大垣市まちづくり推進課)

1. 実践の場の特徴

岐阜県大垣市では、2012年度から大垣市(まちづくり推進課)が(公財)大垣国際交流協会に委託してプレスクール「きらきら教室」を開設している。「巡回指導」(在籍園で園児を対象に個別で行う指導)と「集団指導」(拠点園で親子を対象に実施)を組み合わせた大垣市独自の就学前の支援体制については、2016年第1回大会で実践発表を行った。この10年間で、指導者11名、市役所担当職員9名、国際交流協会担当職員5名の計25名が年度ごとに入れ替わりつつ事業に携わった。指導者の交代や職員異動の都度、情報の共有や引継ぎの難しさがあるものの、各人材の能力が新しくプレスクールに「つながる」ことで進化してきた部分も多い。本年度のプレスクール参加者のルーツは13か国、49人となり過去最多となった。

2. 実践の目標

2016年第1回大会において、「今後の課題」に挙げた3項目を目標として、毎年、事業を進めてきた。これらの観点からこれまでの取り組みを検討したい。

- ① プレスクールの必要性と理解を広めること
- ② 多様な児童に合わせた指導内容の検討と関係機関との協力
- ③ 園の保育における「外国につながる子どもたち」への支援

3. 具体的な実践の内容とその過程

2016年度以降に実践してきた取り組みについて説明する。

3.1 「小学校入学ガイドブック—もうすぐ1年生—」作成(2019年～年次改定)

集団指導時(5回実施)に保護者へ配布していた資料と参考となる情報を1冊にまとめた冊子。

4言語版(ポルトガル語、中国語、英語及びやさしい日本語)。フォントはユニバーサルデザイン書体。視覚的に分かりやすく、より具体的な就学情報(必要なお金、学校との連絡方法、時間割あわせ、入学までにしておきたい習慣等)に努めて編集。母語の大切さ、「発達」の多言語サイト、多言語絵本の紹介等も掲載。情報にはQRコードを付けアクセスのしやすさを工夫。内容の記述については、市教育委員会の監修協力を得ている。市役所ホームページで公開。集団指導時の保護者へは、やさしい日本語と母語の併記版を配布し、毎回の親指導の教材として使用。

3.2 多言語映像教材「小学校入学にむけて」制作(2020年)

ガイドブックを基に、小学校の施設や1日の生活、教科と必要なものなどを4言語で紹介する動画(本編約14分)。市役所ホームページで公開。集団指導時等で利用。

これらの取り組みは、新しく事業に係ることとなったスタッフのデザインやPC編集技術、また映像化に関する知見などがプレスクールに「つながる」ことで実現できた進化と捉えている。

3.3 「保護者(お父さん・お母さん)のための日本語れんしゅうちょう」作成(2021年改訂版)

保護者向けの冊子。1年生の学習内容の理解と保護者自身の日本語学習を促すために指導者グループで作成。鉛筆の持ち方、ひらがなや数字の書き順、助数詞（1年生のさんすう問題で多用）など、家庭での宿題の見届けに役立つ内容に努め、集団指導時にも使用。

3.4 事業で使用する文書に「やさしい日本語」を追加（2019年～）

参加保護者の理解言語の多言語化に伴い、N4レベルの日本語を想定した「やさしい日本語」と分かりやすい表示方法を工夫。試行錯誤する中で、行政の「やさしい」との違い、使用するフォント、年度（元号・西暦）の扱い等、話し合いながら進行中。多言語版の必要性も感じている。

3.5 プレスクール「指導記録票」と「調査票（成育歴）」の小学校への引継ぎと追跡調査

年度末に対象園児の入学先小学校を訪問し資料を教員に直接引継ぎ、さらに入学後の1学期終了時に担任を訪問して、言葉や学習の支援の「つながり」と子どもたちの成長を確認している。

3.6 保育担当課及び教育委員会との「関係課連絡会議」を年1回開催（2018年～）

会議では、プレスクールの子どもたちの現状と課題についての情報共有に努めている。また、この会議で話し合われたアイデアを基に、教育委員会が開催する日本語指導員の研修会にプレスクール指導者が参加し、入学前の子どもたちの現状と課題を紹介することにつながった。

3.7 園の担任と指導者間の連絡帳の活用（2016年～）

巡回指導の様子、個別だからこそみえてくる言葉の問題等、園の担任との情報交換の方法（記録）として活用。また、市が導入した公立園の母語支援員とも「つながる」働きかけをしている。

3.8 母語による語彙調査¹⁾（ポルトガル語、中国語）の導入（2019年～）

多様な言語背景と成育歴をもつ各園児の「特性」を理解し、指導に反映させるために、保護者面談や園の先生方への聞き取りを実施。その上で必要と思われる園児には、市の通訳の支援を得て母語による語彙調査を導入。子どもの持つ力や特性を多面的に理解するよう努めている。

4. 目標の達成度・今後の課題

目標①については、「入学ガイドブック」や多言語映像教材の完成によって、プレスクールの支援内容が可視化され、私たち事業側（市役所、協会、指導者、母語支援者等）がプレスクールで何を伝えるべきか、共有できたことは大きな成果であった。また、コロナ禍で集団指導中止を余儀なくされた状況下でも、保護者に確実に情報が伝わるツールとして就学前準備を促した。そして、プレスクールの支援が、単なる外国にルーツを持つ園児の「ひらがな」学習だけでなく、保護者も一緒に支援している等の理解を外部へ広げることに貢献した。具体的には、市を通じて園長会や小学校校長会でガイドブック等の周知・活用を呼び掛けたことで、「初期指導教室」やプレスクールを受講せずに入学する外国人児童の保護者に対して「入学説明会」で活用された実績が報告されており、目標②の新たな「つながる」を生み出している。

今後の課題としては、目標②に関連して、幼児期からの「とぎれない」支援をめざして、多文化共生担当課、保育担当課及び教育委員会に加え、発達支援担当等の関連部署が「つながり」、様々な立場の「人材」と協力できる体制作りが挙げられる。また、目標③に関連して、2～3歳から長時間を園で過ごす子どもたちが多いことを考慮し、「就学前支援」とは別に、より低年齢の時期から親子への「子育て」や「ことば」の支援や園の「多文化保育」への取り組みなど様々な支援活動が考えられる。

注1) 愛知県(2009)「プレスクール実施マニュアル」資料集 2. 語彙調査 p84～98